# 特定非営利活動法人くにたち農園の会
# ～子育て支援とともに、人間も育てる～

多摩大学　経営情報学部
大八木　雄真（3 年）、内田　大夢（2 年）、菊地　悠吾（2 年）

私達は、東京都国立市にある特定非営利活動法人くにたち農園の会を訪問させて頂き、理事長である小野淳さんにインタビューをさせて頂いて来ました。くにたち農園の会は、「くにたちはたけんぼ」という自由に自然とふれあう体験が出来る畑を中心に、古民家をリノベーションし、イベントや講座などで利用できる「つちのこや」、認定こども園「国立富士見台団地風の子」、レンタルスペース「畑の家」など、様々な活動を行なっています。これらの活動が評価され、第 18 回多摩グリーン賞・経営部門で多摩みらい賞を受賞しました。では、なぜ国立市でこの様な活動を始めたのでしょうか。また、どのような思いで活動しているでしょうか。

## くにたち農園の会が創る価値

2012 年、国立市内の農地を市民が活用することを目指し、国立市「農業、農地を活かしたまちづくり事業」協議会メンバーで企画して、コミュニティ農園「くにたちはたけんぼ」は始まりました。この国立市谷保地域は、崖線からの湧き水や、矢川そして多摩川の恩恵を受けて古くから多くの農家があり、稲作や畑作が行われる一方で、養蚕も盛んな地域でした。そのため、地域住民はいつも自然とふれあいながら暮らしていました。しかし、高度経済成長期に入ると、多摩地域は都心の人口集中を緩和するためのベッドタウンへ移り変わっていきました。都市化は経済的な発展をもたらし人々の暮らしを豊かにする一方、谷保の地域性や土地に根付いた農業を縮小させていきました。

そのような状況を危惧したこともあり、小野さんは、上述した事業に尽力されているそうです。短期的な利益や効果にばかり注目するといった近視眼に陥ると、何百年、何千年とこの地域に息づいてきた特有の価値が看過されてしまいます。小野さんは、その地域特有の価値を大事にする必要があり、伝えていかなければならないと考えています。

この小野さんの考えを聞いて私たち学生は、日本はもの凄く急激に進歩を遂げ、様々な問題も解決してきたかもしれないですが、そのために行なったことが別の問題を生じていることも多いと感じました。そして、何百年、何千年と続いてきた価値を、小さな子供の頃から体験でき、感じることができること、その環境の大切さ、素晴らしさを改めて考えさせられました。

## 実現の手助けをする法人

「くにたち農園の会」で運営する事業の一つに、認定こども園「国立富士見台団地風の子」があります。その起源は、もともとは、国立市富士見台団地の中でお母さん同士が子供の面倒を見る自主保育が 50 年以上つづいた幼児教室だったそうです。しかし、2019 年より国が始めた幼児教育・保育の無償化制度において、認可を取ろうという判断があり、くにたち農園の会が受け皿となって新規開園することになりました。

このようにくにたち農園の会で、法人として受け皿になり、萌芽的な事業を支えているものは、認定こども園の他にも、数多くあります。そこには、一生懸命なにかを実現しようとしている人に手を差し伸べる小野さんの一貫した思いがあります。

「ゼロリスク社会」などという言葉で表されるように、現代の日本は、リスクをなるべく避ける・減らすことが尊重され、そこに力を発揮する人ばかりが評価を受け、リスクを冒そうとする人は鬱陶しがられます。これに対して小野さんは、異を唱えます。実際、くにたち農園の会が運営している各事業は、小野さん自身の発案・企画のものばかりではなく、多くは、何かをやりたいという人が出たときに、その人の話をしっかりと受け止め、その人々の支援をして生み出されてきたものです。

例えば、学生と運営するゲストハウス「ここたまや」は、空きアパート一棟をリフォームして、2019 年より民泊として営業していますが、そのきっかけは、ある大学 1 年生の「ゲストハウス経営をしてみたい」という要望でした。若くて経験もなく、お金もない人に、法人として資金やノウハウ、社会的信頼を提供し、その人々の思いと努力に先行して投資するのです。それが、その人々の成長につながっていき、結果的に今の事業となっています。もちろん、萌芽的な状況で終わってしまった事業も多くあるそうです。しかし、このようにリスクを取り、その人々の思いに賭けることが、いまのくにたち農園の会を形成しているそうです。

今回の多摩グリーン賞は、小さい子供の子育て支援にスポットライトが当たって受賞されましたが、普段、各事業で様々なイベントをしていると、子供だけでなく、参加した親たちの楽しくはしゃぐ姿も珍しくありません。そのような中で、参加しているその両親や家族のほうから、「わたしも手伝ってみたい」とか、「このような企画もやってみたい」という声が上がってくるそうです。くにたち農園の会は、そういった企画の実現を後押しし、支援したりしています。子育て支援だけでなく、そこに関わる「大人も育つ」というところを大事にしています。それがくにたち農園の会の特徴であり、事業が拡大・継続する強みであると感じました。

## お蚕フレンズ

　最後に、くにたち農園の会で、いま新しく取り組んでいる「お蚕フレンズ」という事業を紹介します。養蚕は、地図記号に桑畑の記号があるぐらい、もともと日本ではメジャーな産業でした。もちろん、国立・谷保地域でも昔は養蚕業が盛んでした。東京農工大は、養蚕とその生産設備を研究する大学でありましたし、また、多摩地域を走る南武線は、もともとは多摩川の砂利と生糸を運搬するために敷かれた鉄道だったそうです。

　その後、重工業の発展に伴い無くなっていった養蚕ですが、くにたち農園の会では、そのような地域産業の歴史的価値を再考しながら、一方で手軽に蚕に触れあってもらおうという思いで、「お蚕フレンズ」というプロジェクトを始めました。実際、お蚕を育てることはとても簡単で、桑だけを与えればよく、1ヶ月で繭になるため自宅で手軽に養蚕ができます。

コロナ禍のなかで、自宅での暇つぶしにもなります。そのほか、養蚕に関するSNSを介したコミュニティづくりやオンラインイベントも開催して、蚕の繭をかわいく飾った写真を紹介し合ったり、生糸からつくった作品を共有するなど、暮らしのなかでの愛着づくりを通じて、養蚕を今の社会にも息づかせようとしています。

　このプロジェクトの話を伺って、日本には、養蚕以外にも、その価値を再考できるものがたくさん眠っているのではと思いました。そして、その物語を日常のなかに優しく楽しく取り戻していく取り組み、きっかけづくりが重要であることを学びました。歴史のなかに埋まりかけているものを、ふたたび世に戻して、日本古来の良さを伝えていこうとしているくにたち農園の会の熱い思いが伝わってきました。

## 取材してみて

　今回、非営利活動法人の事業について、初めて取材をさせて頂きました。その中で、私企業ではなかなか展開しづらい事業も、くにたち農園の会では行なっているということを知ることが出来ました。また、このような法人が活躍することで助かっている多くの人々がいることも分かりました。その事業のひとつひとつにも、人のため、地元のため、という思いのこもっていることが、全面に伝わって参りました。非営利活動法人の重要性を、もの凄く感じました。